博士学位論文要約

論文題目：　戴季陶における国民精神論の創出―「内なる近代化」への思想的道程―

氏名：　朱　虹

要約：

本研究は三部構成に「序論」と「結論」を加えて構成されている。

序論において、問題意識、先行研究、課題と方法を論じた。中国の近代化は日本とは無縁のものではなかった。一九世紀末期から二〇世紀初期にかけて、明治維新の改革を成し遂げ、西洋文明を積極的に取り入れて急速に近代化を進めた日本には、中国から数多くの留学生が訪れた。欧化と伝統の狭間で苦闘・脱皮してきた日本は当時の彼らにとって、最も参考になる見本であった。それ故に、彼らの近代化認識の背後には常に日本の影が潜んでいたことはいうまでもない。しかし、従来の中国人日本留学史研究は中国人留学生が日本固有の伝統文化に根差した自発的近代化の可能性をどのように認識したのかという問題を等閑視し、「外からの近代主義」という理論枠組みに拘泥しがちである。本研究では、その傾向を修正する手がかりを近代中国屈指の「日本通」――戴季陶（一八九一～一九四九）の思想に探る。

これまでの戴季陶研究は政治思想史研究の視角からのものが中心である。戴の政治思想の内容とその論理構造を明らかにすることを試みる一方、その思想に内包されている「伝統」と「欧化」の関係を如何に把握するのかに関することを殆ど考慮せず、矛盾した思想家、または首尾一貫した体系を構成していない思想家として捉える。彼は近代日本における「欧化」を伴う伝統主義から一体どのような示唆を得ていたのか、また日本の近代化経験を介してどのように伝統思想としての儒教を再認識していたのか、さらにそれを近代化過程における中国の主体性の確立とどのように結びつけて考えていたのかに関する問題は未だに問われていない。その結果、「革新」と「反動」という短絡的な二項対立の議論に陥る傾向は免れない。そして、戴の教育思想を捉えようとする試みは数少ない。中国の自強を前提とした近代化路線を唱え続けた戴にとって、国家統合という政治的課題と国民形成という教育的課題は表裏一体の関係であった。彼の「中国自強論」を裏付ける根拠である国民精神論をどのように捉えるのかによって、彼の歴史的役割の定位は大いに変わってくる。さらに、彼の国民精神論を問うのはその近代化論を読み解く一つの鍵になると考えられる。

本研究は教育思想史のアプローチから戴季陶における近代国民国家の形成にふさわしい国民精神論の創出と葛藤の軌跡を描き、彼の近代化論の特質を解明しようとする試みである。

戴季陶の近代化へのまなざしは、実際その対日認識を介して形成されたと言えよう。第一部では、日本の「神権思想」に主眼を置き、戴の対日認識の形成・変容過程を考察した。そこでは以下の三点を明らかにした。第一に、戴は初めて「神権思想」に出会ったのは日本留学中のことである。彼が筧克彦の言動を通じて、明治末期の日本における神道信仰の強さと敬虔さを実感した。第二に、帰国後、革命の道に身を投じた戴は日本の対中侵略を強く批判すると同時に、日本の発達の内因を深く検討し、日本の歴史・伝統・文化に深く根付いている国民の「歴史精神」・「共同信仰」、いわゆる「神権思想」からその発達の原動力を見出した。さらに、日本との比較によって、中国の不振の原因が正に固有の「歴史精神」・「共同信仰」たる儒教思想の衰退にあるという示唆を得た。第三に、戴は政治情勢の変動に応じて、「神権思想」をめぐる解釈の動揺を示す一方、「神権思想」に内包される「内発的発展」の可能性を終始否定しなかった。彼の「神権思想」への理解は「日本には真の意味で思想が伝統として蓄積されることがなかった」という丸山真男

の所説とは根本的に様相を異にすることであった。戴が「神権思想」から見出したのは「国家の体質をなす精神的なもの」、「道徳的観念」、「強靭な精神的機軸」という国民統合に資する内向きの力であった。いうまでもなく、戴における国民精神論の創出が彼の対日認識と密接に関わっていた。彼は日本固有の「神権思想」に内包される国民統合の力から、国民精神を構築する際の参考になりうる貴重な理論的・思想的示唆を得て、中国固有の儒教的倫理観から同様の国民統合の力をえぐり出そうとした。

第二部では、第一に、戴の国民精神論の内実をより正確に把握するためには、その前提となる近代国民国家構想を彼の「共和思想」の形成過程を通して再検討した。彼が安直に欧米の制度を模倣せず、強引に伝統思想にも附会せず、伝統思想の再検討・再解釈によって、中国特定の歴史的状況に応じる新しい「連邦共和制」を創出したことを明らかにしてきた。彼の「共和思想」は中国の近代化が孕む「欧化」と「伝統」の相剋を乗り越え、中国固有の伝統思想から西洋近代思想に通底する理念を探りだすとともに、伝統思想を再統合しようとする独自の知的営為の産物であると考えられる。戴にとって、国家は歴史性を背負っており、なおかつ国民精神そのものであった。従って、彼の国民精神論も同じ思惟様式のもとで創出されたものであると言えよう。第二に、戴の国民精神論の位相と特質を浮き彫りにするために、清朝末期から民国初期にかけて、戴と何らかの形で関わりをもっていた康有為、梁啓超、孫文、陳独秀ら四人の国民形成論を取り上げて考察を行った。儒教をめぐる激烈な思想闘争の狭間にいた戴が敢えて儒教に固執もせず、反対もせず、儒教的倫理観を国民の「精神基盤」として捉え直し、近代国民国家にふさわしい形で再生させようとした立場を確認できた。第三に、戴の国民精神論を象徴する「戴季陶主義」の成立過程を探ることによって、その歴史的位置付けの妥当性に検討を加えた。従来の研究は五四運動期におけるマルクス主義への接近と離反を根拠に、戴の思想を裁断してきたきらいがある。彼のマルクス主義への理解を分析することによって、その思想の根柢にある伝統主義――伝統思想の再検討・再解釈・再統合によって近代化に対応する自覚的思惟様式を見出し、それを彼の思想的一貫性を示す根拠として提示し、従来の「両極端な戴季陶像」を是正した。その上、『孫文主義之哲学的基礎』における戴の儒教的解釈を分析することを通して、彼は孫文の「三民主義」を踏まえつつ、儒教的倫理観を以て体系的に再解釈することによって、儒教的個人倫理の枠を乗り越えて、中国固有の「国民共同信仰」に一貫する新たな国民統合の精神基盤を創出したという思想的営為を明らかにしてきた。さらに、彼が求めた「国民精神」は決して西洋型の個人主義的な市民性ではなく、個と全体の調和を重んじる儒教思想のもとに新たに構築された国民性であったことを指摘した。

中国の「自強」を目指そうとした戴にとって、国民精神は共和制国家の確立を支える基盤であった。教育は国民精神の構築に必要不可欠な手段であった。それ故に、彼の国民精神論は一種の「政治論」というより、むしろ「教育論」として位置付けたほうがより適切であろう。第三部では、これまでの研究で見落とされてきた戴の教育との関わりに着目し、彼はどのように国民精神論を国民一般に浸透させていったのか、という課題を検証した。第一章では、戴の教育論説を踏まえながら、彼の中国の国民性への批判を総括した。その上、専門的な人材を養成する役割を高等教育に求め、良善な国民を養成する役割を初等・中等教育に課するという彼の国民教育の構想を確認した。この構想を踏まえて、各段階での教育改革における彼の取り組みを分析した。第二章では、戴が最初に携わった教育改革――中山大学の改革を通して、政治訓育の必要性を痛感し、三民主義教育を「国民教育の方針」として確立したことを論証した。第三章では、戴は中山大学の学長就任を契機に、初等・中等教育へ浸透させていくルート――「童子軍教育」を発見した。彼はイギリス発のボーイスカウトの組織構造を借りつつ、中国固有の儒教的倫理観をベースに童子軍教育の再編・整備を実行した。彼は童子軍教育を国民教育の一つの手段として中国全体の国民精神を構築し、「内なる近代化」の実現を図ったことを解明した。

戴が示した国民精神論は、中国が近代国民国家を立ち上げていく過程と並行して、国民精神を

いかに構築するかという問題意識のもとで練り上げられたものである。それは決して机上の空論ではなく、みずからが置かれた歴史的状況に臨み、それを一生懸命に認識し、行動しようとした思想的営為にほかならない。勿論、それには時代的刻印が押されていたことは否めないが、今日に至ってもじつに示唆的なところが多いと考えられる。

周知のように、中国は一九七八年「改革・開放」政策を実施して以来、急速な経済成長を遂げた。しかし、物質文明の発達の反面、精神文明の荒廃が顕著化してきた。精神の空洞化は、必ず道徳の喪失と文化の堕落を招く。近年、道徳意識の欠如が背景にあるとみられる事件や事故が相次いでいる。今日、どのように中国社会全体の道徳意識の低下に歯止めをかけるのか、といった教育的課題を考える上で、本研究で検討してきた戴の国民精神論は、大いに参照するに値するはずである。さらに加えて言えば、儒教的倫理観を内包する彼の国民精神論にはいくら時代が変わっても色褪せない普遍性が内在されていると言えよう。それは人間の内面を律する倫理基準のみならず、「社会連帯責任主義」に基づく調和のとれた社会の構築原理でもあると考えられる。

戴季陶の思想、とりわけ国民精神論の創出をめぐる思想のあり方に、現在の中国が抱えるさまざまな問題の解決可能性やこれからの近代化の方向性を見出して、本研究の結論とした。